

たはら 探訪 歴史クラブ 其の62

TAHARA History Inquiry Club

潮騒の伊良湖岬

恋路ヶ浜…なんとロマンティックな地名でしょう。こんな地名を聞けば、誰でも一度は訪れてみたくなるのではないのでしょうか。

恋路ヶ浜は、伊良湖岬灯台から日出の石門までの約1km、太平洋の荒波を受けて湾曲する白く美しい砂浜で、伊良湖岬を代表する観光地です。名前にひかれて訪れるカップルなど、多くの観光客でにぎわいます。

さて、今回の歴史探訪クラブでは、「恋路ヶ浜」の地名の由来について取り上げてみたいと思います。

恋路ヶ浜には、ある伝説めいた

お話が伝えられています。『その昔、都から高貴な男女が、恋の逃避行のため伊良湖に逃れてきて、幸せに暮らし始めました。しかし、これを快く思わない人々の目にさいなまれ、男は裏浜（三河湾側）の弁財ヶ浜に、女は表浜（太平洋側）の恋路ヶ浜に別れ住むようになりました。2人は会うこともままならず、ひそかに手紙をやりとりしてやるせない気持ちを耐え忍んでいましたが、やがて病気になる、世をうらんでお互いに名前を呼びつつ死んでしまいました。そんな女の執心がこもって、「女貝」になり、男の一念がこもって、「ミル貝」になりました。』と。こんな話から、恋路ヶ浜」と呼ばれるようになったというのですが、これはどう考えても史実とは思えません。あくまでも地元で伝わったお話として理解



白く美しい砂浜「恋路ヶ浜」

した方がよさそうです。

また、こんな説もあります。その昔、宮山（伊良湖ガーデンホテル南側の山）と古山（恋路ヶ浜がある渥美半島最先端の山）との間、現在の国道42号線と国道259号線がぶつかる谷の部分に、太平洋側と三河湾側を往来する運河のような水路がありました。そこを「越路（こえじ）」と呼んでいましたが、徐々に音が変化して「こいじ」となり、その音に「恋」と「路」という漢字が当てられたということ。太平洋側に抜けるのに、潮の流れの速さから、「海の難所」といわれる伊良湖水道（度合）をうかいできるとあれば納得もできますが、ただ、こちらの説にも確たる証拠はありません。

江戸時代、吉田（豊橋）の歌人・林織江が著した紀行文『伊良古之記』には、「恋地か浦にて 春さめにぬれてひろはんいらこ崎 恋地かうらの恋わすれ貝」とあり、このころには、すでに「こいじ」と呼ばれていたことは確かそうです。

明治31年（1898年）に伊良湖を訪れた柳田國男は、『遊海島記』に「小山の松林より東、外海の岸は、昔より恋路ヶ海、玉章の磯などいふ。何の故とも知らず。」と記し



上空から見た伊良湖岬

ています。続けて柳田は、この浜の様子を「涛高く飛沫霧と立ちて、物凄じき荒磯なり。打向ふ海は大難の果も無く、沖を走る大船は目よりも高く、仰ぎて見るやうなる心地す。此渚伝ひに歩めば、心留まるもの多し。」と述べています。

現在の恋路ヶ浜は、「白砂青松」「道」「渚」「音風景」の4つの日本百選に選ばれています。近年、海岸浸食などにより、かつての景観が失われつつあるため、さまざまな保護対策が行われています。柳田國男が椰子の実を拾い、島崎藤村が「椰子の実」を作詩するきっかけとなった美しい砂浜。いつまでも大切にしたいものです。ね。（天野）

田原市博物館 22局1720